

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月26日現在

機関番号：23302

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成21年度～平成23年度

課題番号：21592820

研究課題名（和文） 育児困難や虐待に悩む母の自己効力感を高めるペアレンティングプログラム第2版の開発

研究課題名（英文） Development of Parenting Program Enhancing Mother's Parenting Self-Efficacy (Second Version) to Prevent Problems of Childcare Difficulty or Child Abuse

研究代表者 西村 真実子（MISHIMURA MAMIKO）石川県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：50135092

研究成果の概要（和文）：

我々は2007年より育児不安・困難に悩む母親に対して、カナダで開発されたペアレンティングプログラム「Nobody's Perfect（以下NP）」を実施し（第一段階）、その評価研究から出た課題を解決するために、フォローアップNPを展開（第二段階）、さらに、乳幼児の母の子育て支援ニーズの実態調査結果から、NP参加の母がグループの枠組みを超えて新たに集まり、テーマを決めて話し合う「親育ち・子育てを考える会」と、母の希望が多かった、子どもと離れて自由に過ごす「どろっぷインルーム」等を設けた（第三段階）。本研究では「母の自己効力感を高めるペアレンティングプログラム第2版」として新たに設けた、二段階目と三段階目のプログラム内容の評価結果と、子育て支援ニーズの実態調査の結果を報告する。

研究成果の概要（英文）：

We have developed the parenting program enhancing mother's parenting self-efficacy to prevent problems of childcare difficulty or child abuse from 2007. The Purpose of this research is to evaluate the parenting program enhancing mother's parenting self-efficacy(second version). This parenting program (second version) was constituted 'Nobody's Perfect; NP' parenting program for mothers with problems of childcare difficulty or child abuse that had been developed in Canada (first grade), the follow-up NP program(second grade) and 'Mother and Child Group' that members of NP program meet another members who are not members of former group(third grade). The aims of this program is to empowered mothers and to make the friends who supports each other, and to notice new ideas about parenting and parenting skills of which will make use, to reduce the anxiety and the irritation with the child care.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：ペアレンティング・プログラム、子育て支援、子ども虐待予防、母親、自己効力感

1. 研究開始当初の背景

1) 育児不安・育児困難・虐待の問題

大規模な子育て意識調査である 1980 年の大阪レポートと 2003 年の兵庫レポートを比較すると、子育てでいらいらする、不安があるなどの母が増えている。子育てに不安を感じたことのある者は 8 割を超え、「どうしたらいいかわからない」と困惑したことのある者が約 6 割、子育てをするのが困難だと感じたことのある者が約 4 割を占める^{1~3)}。このような母親のネガティブな思いは「育児不安」と総称され、抑うつ傾向や暴言・暴力などの虐待に繋がる場合もある。子どもへの暴言・暴力の実態については、どのようにそれを質問するかにより調査結果には幅はあるが、1~4 割の母親にみられるとされている^{4,5)}。

また、子育ての意識調査の結果を因子分析し、「育児不安」の本態を明らかにしようとした研究によると、育児不安は次の 5 つの要素に係わる感情・態度であると説明されている。5 つの要素とは、「育児困難感Ⅰ（心配・困惑・不適格感）」、「育児困難感Ⅱ（子どもへのネガティブな感情・攻撃衝動性）」、「母親の不安・抑うつ傾向」、「夫・父親・家庭機能の問題」、「夫の心身不調」、「Difficult Baby（取り扱いが難しい気質の子ども）」であり、これらは相互に関係し合っている。「育児困難Ⅱ」は 1 歳を過ぎた幼児の母親にみられるものであったが、その他の 4 つは子どもの年齢に関わらず、母親の育児不安を構成する要素であった⁶⁾。「育児困難Ⅱ」は、子どもへのネガティブな感情や攻撃衝動性がもたらす困難な育児状況を示しており、暴言や拒否的な態度などの虐待状況も含まれている。

2) 子育ての悪循環

このような育児困難や虐待状況に悩む母は自己肯定感や自己効力感が低いことが多い。また、良い親にならなければならない等の理想や社会規範意識が強く、そうでない自分や他者を時として受け入れるのが難しく、イライラや怒り、自責感に悩まされることもあるという。あるいは、警戒心や不信感、緊張が強く、自分を素直に出せなかったり相手に合わせすぎたり等、相手との適切な距離感をとるのが難しいこともある。また、自己肯定感が低いと、物事をネガティブに受け止めてしまうこともあると思われる。このようなストレスフルな心理状況が続くと、引きこもりがちになったり孤立し、さらにそのことによって子育て状況がより悪化していくという悪循環に陥ってしまいがちである。

3) 育児困難や虐待の予防的支援

近年の核家族化、地域社会の交流の希薄化、少子化は、かつて子育てが家庭や地域社会にみ

られた知恵の伝承やモデル学習、世代間や住民相互の相談・サポート機能をなくしてしまった。かつては、育児に問題状況があっても、地域のこれらの機能が親を助け、子どもと親を成長へと導いていった部分があったと思われる（これらの機能のマイナス面もあったと思われるが）。

そこで、これらの機能を備えた親への支援システム、支援プログラムとして、「母の自己効力感を高めるペアレンティング・プログラム第 2 版」を考えた。

4) 「母の自己効力感を高めるペアレンティング・プログラム第 2 版」の概要

本プログラムは、育児不安・育児困難・虐待傾向の悩みをもつ親たちを対象としている。次の 4 点をねらいとし、3 段階の親支援プログラムを設置している。

4 つのねらいとは、①託児によるレスパイトケア、②同じような悩みをもつ親同士のサポートティブな交流促進によるエンパワーメント、③子育て経験等の共有による自分に合う子育ての考え・具体的方法・知恵、あるいは自分の長所への気づきや獲得をめざした心理教育的支援（具体的には、イライラへの対処や嫉妬等が少しでもできそう・やってみよう、今こんなふうに行っているのがよいことだ等と思えるようなプログラム体験をすること）、④サポートし合う仲間づくりである。

親支援プログラムの一段階目は、カナダ政府が開発した子育てプログラム「Nobody's Perfect（以下 NP と略す）」である。ちらして 12 名の参加者を募集し、週に 1 回、2 時間の加者中心のグループワークを主体とするセッションを連続 6 回行う。これを育児困難や虐待傾向に悩む母を対象として実践した。上記の 4 つのねらいに加えて、育児不安・困難感の軽減をねらいとした。

二段階目は、一段階目の NP の終了後 2 ~ 3 か月毎に 3 回、同じ対象者が集まり、NP と同じ考え方でテーマを決めて話し合う「NP フォローアップ・プログラム (NPFU)」である。ねらいは、一段階目の NP と同じ 5 点であるが、特に仲間づくりの強化・修復と、一段階目の NP の中で育てられたグループの安心感を基にして、自分の客観視や自分に役に立つ子育ての考えや方法の獲得がより進むよう配慮した。

三段階目のプログラムは、NP 経験者を対象に、これまでのグループの枠組みを超えて新たに集まり、テーマを決めて話し合う「親育ち・子育てを考える会（以下考える会と略す）」である。おおよそ 1 か月毎に 3 回セッションを行う。ねらいは二段階目の NPFU と同じ 5 点であるが、特に、新しい仲間づくり

を意識した。また参加者には、一段階目・二段階目で同じような悩みをテーマとしたNPを経験してきたという共通意識があると思われたので、グループの安心感が早くに獲得されるよう配慮した。

三段階目のプログラムにおいては、レスパイト機能を充実し、考える会の開催時間以外の時間においても子どもと離れ、自分だけの時間を過ごす『どろっぷ・イン・るーむ』を開設した。また、託児スペースに親子で訪れるのも可能とした。

以上のような①親育ち子育てを考える会、②どろっぷインるーむ、③託児スペースへの親子参加という3つの機能を備えた場を「ドロップ・イン・さろん」とした。

5) 本研究の構成

本研究は3部構成をとっている。まず、「母の自己効力感を高めるペアレンティング・プログラム第2版」の二段階目の『NPフォローアップ・プログラム』を評価した。第一段階のNPプログラムの評価は、2006年度～2008年度科研費基盤研究Cにおいて実施済みである。

次に、子育て支援のニーズ調査を実施した。前述した「家庭や地域社会にかつてあった子育て支援機能」を現代の母たちが求めているかについてや、その現代版として我々が提示した子育て支援策に対する意見等を問うた。

そして、このニーズ調査の結果を参考にして、三段階目の『子育てどろっぷ・イン・さろん』を実施し、その評価を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、我々が開発途上の「母の自己効力感を高めるペアレンティング・プログラム第2版」の運営手法を、実践・評価・修正・フィードバックのプロセスをとりながら精選していくことである。

3. 研究の方法

1) NPフォローアップ・プログラム(NPFUと略す)の評価の方法

(1) 対象者

フォローアップNPを行った4グループに参加した29名

(2) 調査方法

無記名による質問紙調査を、FUNP1回目後、2回目後、3回目後に配布し、郵送により回収した。

(3) 調査内容・測定尺度

基本属性として、年齢、仕事の有無、子どもの人数・年齢、同居家族を聞いた。FUNPの5つのねらいのうち、レスパイトケアを除いた4つのねらいについては、表1に示した各評価指標(尺度)を用いて評価した。

(4) 調査期間

2009年6月から2010年2月

表1. FUNPのねらいとその評価指標(尺度)

ねらい	評価指標		
	測定尺度(得点)	NP中の経過記録の質的分析	質問項目
サポート型な関係性の強化・修復	被サポート感尺度(東)	0	その後のグループ活動状況
エンパワーメント	子育ての自己効力感尺度日本版	0	プログラム実施後の自由記載アンケート
新しい視点・考え・子育て方法の発見と自己理解		0	プログラム実施後の自由記載アンケート
育児不安・育児困難の軽減	ベックのうつ尺度日本版・総研式育児不安尺度(川井らの下位尺度「育児困難I」「育児困難II」)	0	虐待不安を問う項目

(5) 倫理的配慮

調査票に調査の主旨を明記し、調査結果は統計的に処理し、個人が特定されることはないこと、データは調査目的以外に使用しないこと、個人情報もれることはないこと等を明記した。

2) 子育て支援ニーズ調査の方法

(1) 対象者

育児不安や育児困難に悩むNP終了者と子育てサロンを利用した乳幼児の母親

(2) 調査方法

無記名による自記式質問紙を、NP終了者には郵送、子育てサロンを利用した母親には施設に設置した投函箱で回収した。

(3) 調査期間 2009年8月から9月

(4) 倫理的配慮

NPFUの評価の調査と同様の対応をとった(上述の3-1)-(5)参照)。

3) 親育ち・子育てを考える会の評価の方法

(1) 対象者

親育ち・子育てを考える会に参加した母32名(2011年6～8月実施グループの参加者6名、9～11月実施グループの参加者11名、2012年2～3月実施グループの参加者15名)。

(2) 調査方法

無記名による自記式質問紙を、考える会開始前と3回目終了時に実施した。開始前の調査用紙は郵送し、考える会1回目に持参してもらい、回収箱に入れてもらった。終了時の調査は、3回目セッションの時に渡し、郵送により回収した。

(3) 調査内容・測定尺度

属性、およびベックうつスケールII日本版、自己効力感尺度日本版(TOPSE)、総研式育児不安尺度の下位尺度の「育児困難I」「育児困難II」(表1参照)

(3) 倫理的配慮

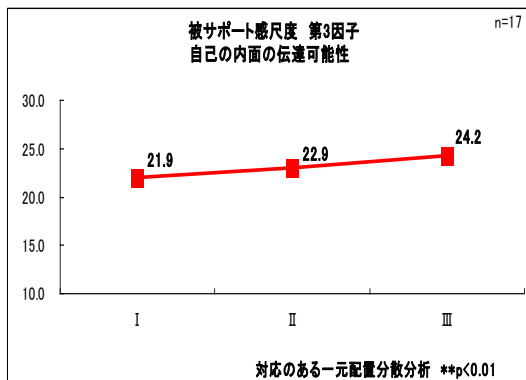
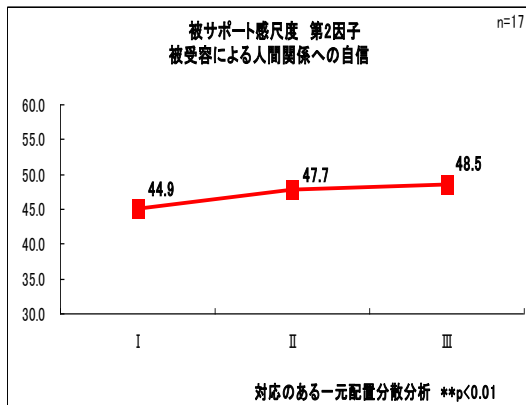
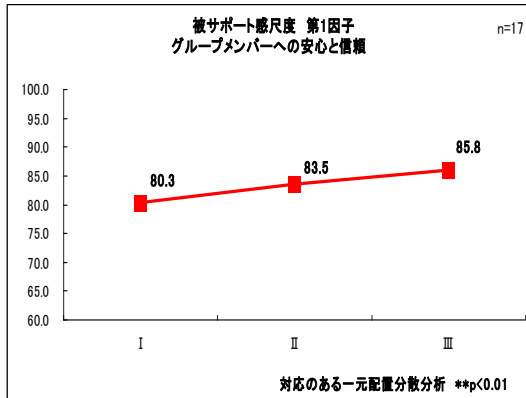
NPFUの評価の調査と同様の対応をとった(上述の3-1)-(5)参照)。

4. 研究成果

1) NPフォローアップ・プログラム(NPFWと略す)の評価の結果

(1) サポートし合う関係性の強化・修復の評価

被サポート感尺度では3下位尺度すべてにおいて、3回目終了後の得点は1回目終了後の得点より有意に上昇していた。回を重ねる毎に、グループメンバーへの安心と信頼、被受容感が高まり、自己の内面についても話すことができるような関係性になった。



(2) エンパワーメントの評価

子育ての自己効力感に変化はみられなかった。第一段階目のNPプログラムで低かった自己効力感が上昇し、一般母親242名の平均値より高くなっていたために、FUNPでは変化がみられなかったと考える。

(3) 育児不安・育児困難感の評価

育児困難感尺度の下位尺度「育児困難感Ⅰ(心配・困惑・不適格感)」では、1回目終了後にランク4(要支援)・5(要治療)の5名のうち1名が、2・3回目終了後にランクが下がり正常となった。「育児困難感Ⅱ(子どもへのネガティブな感情・攻撃衝動性)」では、ランク4・5の要支援/要治療の4名のうち2名が2・3回目終了後に正常となった。

2) 子育て支援ニーズ調査の結果

976名のうち482名(回収率49.4%)より回答があり、これらを分析対象とした。内訳はNP終了者54名(76.1%)、子育てサロン来訪者428(47.3%)であった。

(1) 親育ち子育てを考える会へのニーズ

「考える会」に“参加する”が39名(8%)、“時間が合えば参加する”371名(67%)であり、合わせると75%の母が参加する意向を示した。

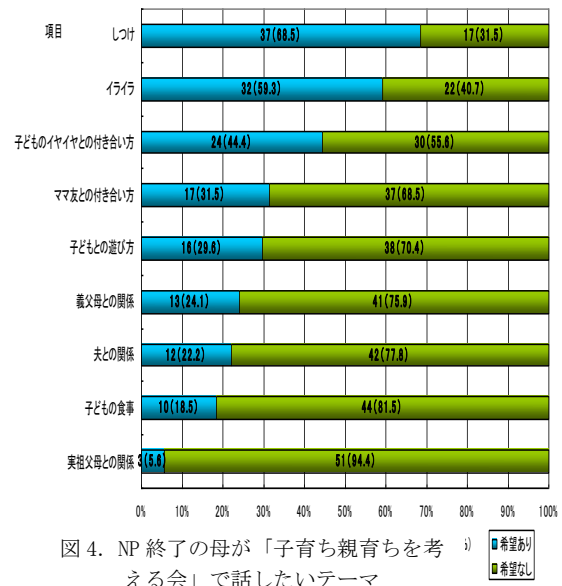


図4. NP終了の母が「子育て親育ちを考える会」で話したいテーマ

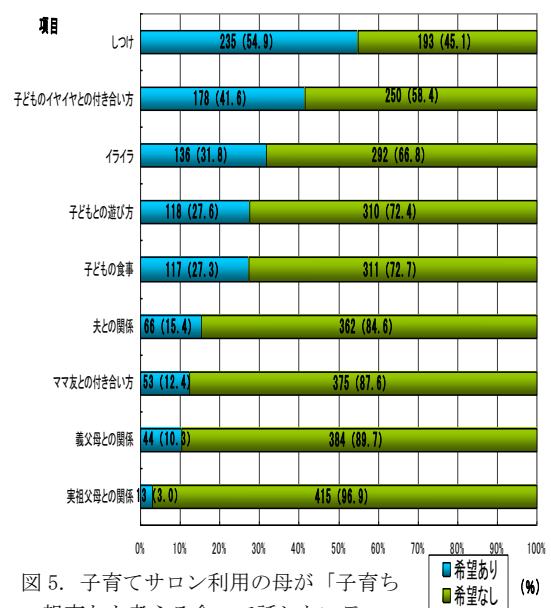


図5. 子育てサロン利用の母が「子育て親育ちを考える会」で話したいテーマ

NP終了者が希望するテーマの上位はしつけ 68.5%、イライラ 59.3%、子どものイヤイヤとの付き合い方 44.4%で、子育てサロン利用者のテーマに比べて、しつけ、イライラを希望する割合が高かった。また、「考える会」への参加希望は、無職（主婦）の母がそうでない母に比べて、また“イライラする、叩いてしまう、自分をわかってくれる人がいない”と悩む母が悩まない母に比べて有意に多かった。

(2) 子育てスキルのモデル学習へのニーズ

「子育てスキルのモデル学習」に“参加する”が39名(6.4%)が、“時間が合えば参加する”337名(69.9%)で、合わせると75.5%の母が参加する意向を示した。

希望するスキルは、イヤイヤと付き合う方法 292名(60.6%)、子どもの病気の対処方法 243名(50.4%)、自分の時間のつくり方 187名(38.8%)の順で多かった。

(3) 「子育てサロン等」の場に望む機能

NP終了の母が望む機能の上位は、子どもを預けてリラックスできるスペースが46名(85.2%)、親子一緒にのスペースが33名(51.1%)、託児が31名(57.4%)であり、子育てサロン利用の母の上位が親子一緒にのスペース315名(73.6%)、子どもを預けてリラックスできるスペース200名(46.7%)、託児163名(38.1%)であるのと比べて、子どもを預けてリラックスできることや託児を希望する者が多かった。また、NP終了の母が、一人になれるスペースを16名(29.6%)希望しており、子育てサロン利用の母の30名(7.0%)に比べ、割合が高かった。

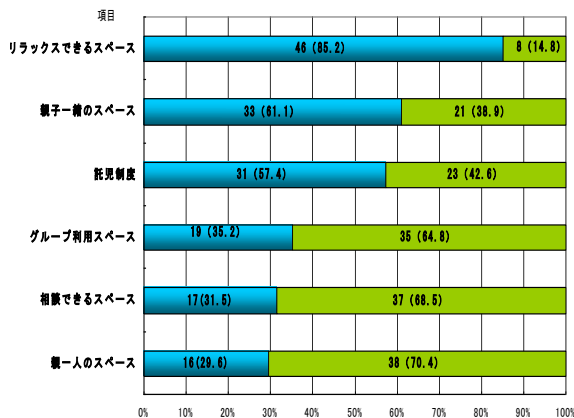


図6. NP終了者がレスパイトケアの場に望む機能

さらに、時間がない、イライラする、叩いてしまいそうであると悩む母が、悩まない母に比べてリラックスできる母親だけのスペースを希望する者が、またイライラする、叩いてしまいそうであると悩む母親が託児を希望する者が有意に多かった($P<0.05$)ことから、育児困難状況にある母は、一時的に子どもから離れるレスパイトケアを望んでいる者が多いことがわかった。

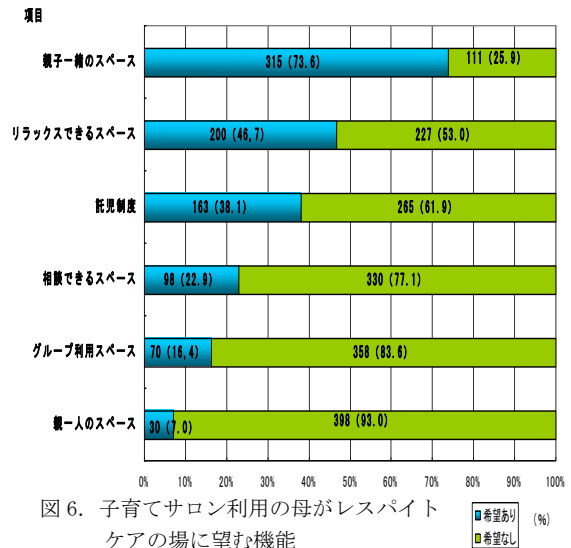


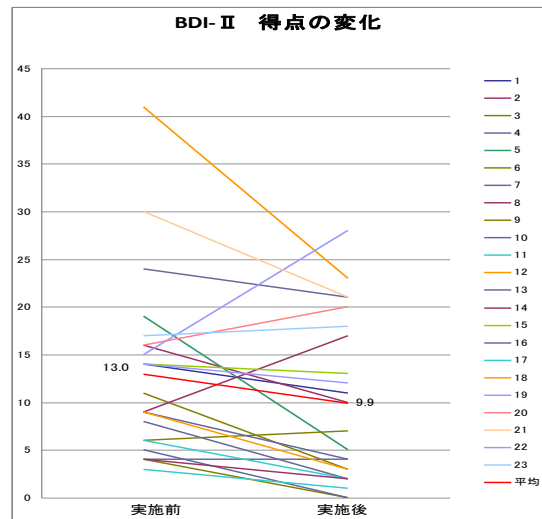
図6. 子育てサロン利用の母がレスパイトケアの場に望む機能

3) 親育ち・子育てを考える会の評価の結果

考える会の前後ともに回答が得られたのは23人で、平均年齢は36.2±4.9歳。

(1) エンパワーメントの評価

考える会終了後のうつ尺度の得点が、開始前の得点に比べて有意に低下していた。

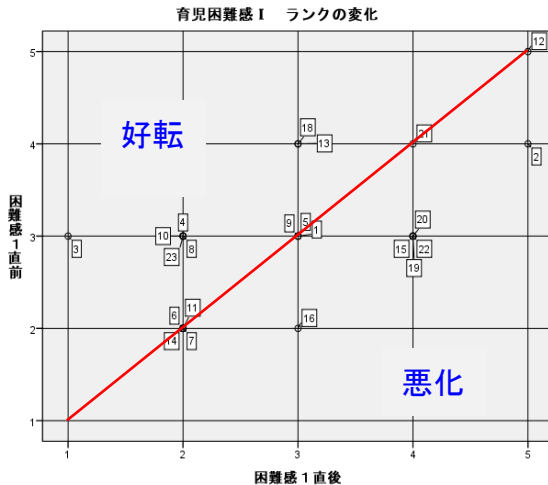


また、子育て自己効力感尺度の下位尺度「子どもの理解と情緒的相互作用」「しつけとセルフコントロール」「プレッシャーとバンダリー」「ルールを守らせる力」の考える会前後の得点は、一般の母244名の結果よりいずれも高く、「子どもの理解と情緒的相互作用」得点は3回目終了後に有意に上昇した。

(2) 育児不安・育児困難の評価結果

育児困難感I(心配・困惑・母親としての不適格感)は好転した者が7名、悪化した者が6名であった。育児困難感II(子どもへのネガティブな感情・攻撃衝動性)は好転した者が12名、悪化した者は4名だった。

うつ得点が低下し、自己効力感得点が上昇したのは、終了時の自由記載アンケートやセ



セッション中の会話内容の質的分析の結果(本稿では省略)から次の点が関与している可能性が考えられた。まず、参加の母はNPを経験しているという共通意識があり、場の安全性を理解していたため、忌憚のない話ができ、また同じ悩みをもつ新しい仲間との出会ったこと、子育ての新しい考えやスキルが獲得できたことである。

4) 今後の課題・展望

考える会において、育児困難感が悪化した者もいたので、セッション中の参加者相互のやり取りに細心の注意を払い、参加者の特徴をより配慮したファシリテーションの検討、仲間作りのアクティビティの強化、セッション回数を増やすことが必要である。

また、NPや考える会、レスパイトケア等を研究グループだけで開催するには限界がある。今後は、行政やNPO 団体と連携し、育児困難や虐待状況にある母が気軽に立ち寄れる居場所づくりを計画する予定。これまでの我々のプログラムに加え、母が望む居場所機能を充実し、評価研究を進めていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線) [学会発表] (計7件)

1) 西村真実子、米田昌代、堅田智香子、東雅代、曾山小織、伊達岡五月、吉田和枝：育児不安や困難に悩む母親を対象としたNobody's Perfectプログラムの開発：プログラム参加群と対照群における子育てに関する心理・行動面の変化からみた評価、日本子ども虐待防止学会 第15回学術集會埼玉大会、平成21年11月27日、大宮市

2) 米田昌代、西村真実子、堅田智香子、東雅代、曾山小織、伊達岡五月、吉田和枝：育児不安や困難に悩む母親を対象としたNobody's Perfectペアレンティング・プログラム実施直後・1か月後・3ヶ月後の子育てに関する認知・行動面の変化、日本子ども虐待防止学会 第15回学術集會埼玉大会、平成21年11月27日、大宮市

3) 西村真実子、米田昌代、堅田智香子、東雅代、曾山小織、伊達岡五月、吉田和枝：育児不安や困難に悩む母対象のフォローアップNobody's Perfectプログラムの評価：話し合い内容の質的分析、第51回日本母性衛生学会学術集會、平成22年11月6日、金沢市

4) 米田昌代、西村真実子、堅田智香子、東雅代、曾山小織、伊達岡五月、吉田和枝：フォローアップ Nobody's Perfect プログラムの評価：母親グループメンバー間の被サポート感の変化、第51回日本母性衛生学会学術集會、平成22年11月6日、金沢市

5) 東雅代、西村真実子：母親グループにおける被サポート感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討、第57回日本小児保健学会、平成22年9月18日、新潟市

6) Mamiko Nishimura, Hitomi Inoue, Masayo Yoneda, Chikako Katada, Masayo Azuma, Saori Soyama, Satsuki Dateoka, Kazuyo Yoshida: The Mentality of Mothers with Problems of Childcare Difficulty or Child Abuse: The Wrong Cycle Surrounding Self-Denial, 14th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS)、平成23年2月11日、韓国ソウル市

7) Masayo Azuma, Mamiko Nishimura: Research on the Feelings of Being Supported by a Group of Mothers Engaged in Circle Activities and a Group of Mothers who Struggle with Anxiety and Difficulties in Parenting, 14th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS)、平成23年2月11日、韓国ソウル市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 真実子 (MISHIMURA MAMIKO)
石川県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：50135092

(2) 研究分担者

- ・米田昌代 (YONEDA MASAYO)
石川県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号：80326082
- ・堅田智香子 (KATADA CHIKAKO)
石川県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号：70468221
- ・東 雅代 (AZUMA MASAYO)
石川県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号：80457887
- ・曾山小織 (SOYAMA SAORI)
石川県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号：90405061
- ・伊達岡五月 (WADA SATSUKI)
石川県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号：90509572
- ・吉田和枝 (YOSIDA KAZUE)
石川県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：5035303